

どこの国でも、話し言葉と書き言葉との間に違いがあるが、日本語では、その違いが大きいようである。

何か聞かれた時に、たいていの人は「そうですね、やっぱりあの一」と言ってから話し出すが、その言葉自体には意味が無く、強いて言えば「あなたのおっしゃることは承りました。それについては――」ということであろう。いきなり直接的に意見を言うのは、失礼と思われているのかもしれない。

こうした無意味語は、あの一、この一、その一、まあ、あー、うー、うーん、んー、えー、えーと、えっとー、こー、そー、もー、ね、ねえ、ですね、ですよ、とか、ちょっと、いわゆる、それこそ、やっぱり、と数え上げれば切りが無い。

一番多いのが「あの一」である。ラジオでの話し手は、アナウンサーも含め、「あの一」を連発する。30分間話すと、100回は出てくる、多い人になると300回を超す。「あの一、あの一、あの一」と連発する人もいる。当人は無意識にしゃべっているが、忠実に速記をとって見せれば、こんなに数が多かったかと驚くに違いない。こうした無意味語は、書き言葉では、すべて消されることになる。新聞の文章には出てこない。外国語に翻訳することも難しい。

昔、中学校の英語の教科書で、“Well, let me see”という表現を習ったが、英米人がそう言うのを聞いたことがない。英国人は「アムー」、米国人は「ズィアー」あるいは「ユーノウ (you know)」と間を取る。こちらも通訳の時には、「ズィアー」と言いながら次の英語を探し出す。以前、これを多用して、外務省の課長さんから、聞き苦しいと注意されたことがある。日本語に流暢な外国人にも、「あの一」を多用する人が多い。

「あの一」を言わない人としては、渡辺和子（ノートルダム清心学園理事長）、田部井淳子（登山家）、團伊玖磨（作曲家、エッセイスト、故人）などがある。何れも主題と話の中身が明白で、「あの一」と間を取って次の言葉を考える必要がないためである。ただし、渡辺和子、田部井淳子とも、雑談に移ると「あの一」が出て来る。

「あの一」は話を和らげ、親しみを持たせる効用があると言うのは、誤りである。團伊玖磨からは、ラジオを通じて40分間にわたる実に愉快的興味深い話を聞く機会があったが、「あの一」は一言も出てこないのに感心した。

無意味語にも地方色がある。関西では「あの一」より「えーと」が多いようである。京都大学では「えっとー」となるので、西堀榮三郎南極越冬隊長（故人）を思い出す。

日本の政治家の話が、英米の政治家に比べて迫力と納得性に劣るのは、日本語固有の曖昧さもあるが、「あの一」の多用も災いしている。故大平首相も「あー」「うー」で知られていた。しかし、速記が文章語になったのを見ると、実に理路整然としていた。

私は「あの一」節約運動が必要であると、かねがね思っていた。ある会合で「あの一」を撲滅しようという話をしたら、聞き手の一人から「あなたは話の中で一度「あの一」と言いましたよ」と言われてギャフンと参ったことがある。

そういえば、国語学者の金田一春彦が外国人から「やはり」と「やっぱり」とどちらが正しい日本語の用法かと聞かれ、しばらく考えて「やっぱり」「やはり」が正しいと思います」と答えて、相手の目を白黒させたことがあると聞いた。

無意識のうちに、多くの日本人の頭脳は無意味語で支配されているようである。